

長期管理を通して上顎犬歯唇側転位を伴うAngleⅡ級過蓋咬合に対応した一例

○松本 祐子¹⁾、岩崎 智憲²⁾、齊藤 一誠²⁾、
山崎 要一²⁾

1) 鹿大病・歯科総合、2) 鹿大・院医歯・小児歯

【緒言】小児歯科臨床では、顎口腔器官の発育開始から完成に至るまでの継続的管理が望ましく、患者との関わりは長期に亘る。本症例は6歳時から21歳になる現在まで受診が続いており、主訴の様々な変遷をたどって来た。今回、長期管理の重要性を交えて報告する。

【症例】16歳 男子

主訴：歯並びが気になる。

現病歴：6歳時に当科初診。7歳時に下顎前歯部叢生の改善を希望し約2年間、FKO、リップバンパーにて咬合誘導を行った。側方歯群の交換を経て不正咬合状態を呈したため、家族の希望もあり治療再開を勧めたが、本人の拒否の意志が固く、定期健診のみを継続した。しかし高校入学後に本人が治療希望に転じた。

歯列咬合所見：第一大臼歯はAngleⅡ級咬合で、上下歯列の狭窄、上下前歯部の早期接触による下顎の後方誘導、オトガイ部の前方への過成長が認められた。

診断：上顎犬歯唇側転位を伴うAngleⅡ級過蓋咬合

【治療方針および経過】上顎歯列を側方拡大し、前歯部を唇側傾斜させて機能的要因を除去後、咬合を挙上して下顎歯列の側方拡大とレベリングを行うこととした。また、後戻りを考慮し、切端位を治療目標とした。

上顎：前歯の位置は変えず、咬合挙上後に両側第一小臼歯を抜去し、犬歯の遠心移動と第一大臼歯の近心移動により1歯対2歯のⅡ級咬合とする。

下顎：前歯部は骨が薄いため唇側傾斜は行わずストリップングで対応し、臼歯部を製直させ、第一大臼歯の位置は変えない。

最終的な調整にはMEAWを併用して時間短縮を図り、治療開始から2年7か月の動的治療期間を経て良好な咬合関係が得られた。保定は上下顎一体型のソフトリテーナーを使用した。患者は県外の大学に進学したため、長期休暇時の定期健診を継続し、2年以上経過した現在も咬合関係は良好である。

【まとめ】長期管理の中では、患者の成長に伴う主訴の推移への的確な対応が必要となる。信頼関係を維持し、患者の要望に応えられる技術の研鑽も重要である。

低位乳歯が原因で永久歯の傾斜・萌出障害を起こした一例

○伊東 泰蔵¹⁾、板家 隆²⁾

1) いとう歯科医院（熊本市）

2) 板家小児歯科医院（北九州市）

【緒言】低位乳歯とは混合歯列期までの咬合で現在の咬合線より低位に存在しているものをいう。このような症例では隣接永久歯の傾斜や後継歯の萌出障害を招くことがある。

今回、下顎右側第二乳臼歯の低位乳歯に遭遇した。同歯の経過観察中に隣接第一大臼歯の近心傾斜および低位乳歯の著明な沈下傾向が認められたので下顎右側第一大臼歯を遠心に誘導し、低位乳歯抜去後に下顎右側第二小臼歯の萌出を認めたので報告する。

【症例】

患者：6歳2ヵ月の男児

主訴：下顎右側第二乳臼歯の未萌出

初診日：2005年6月 板家小児歯科医院（北九州市）

現病歴：学校歯科健診で未萌出を指摘されて受診。

現症：初診から半年後に、左側下顎第一大臼歯が萌出開始し、その後に左側臼歯部は咬合していた。経過観察1年半後（7歳11ヵ月）、右側臼歯は近心傾斜しながら萌出。乳臼歯は沈下の傾向を示し埋伏化が認められ、同部のスペースは減少していた。この時期父親の転勤のため、2008年3月（8歳11ヵ月）いとう歯科（熊本市）を紹介後受診。

パノラマX線所見：低位乳歯根と後継歯の歯冠部とが密着していて骨性癒着様を認めたが、後継歯胚の発育は左側と差はなかった。

処置および経過：エクステンション・リングルアーチを装着するために、固定源を反対側の第一大臼歯と右側第一乳臼歯に求め遠心に誘導を開始した。約3ヵ月後スペースを確保して、埋伏している乳臼歯を局所麻酔下で抜去した。骨性癒着を認めたので直下の永久歯を傷つけないように分割して行い、経過観察はオブリックセファロX線規格写真を含めて追究した。以後3ヵ月ごとのチェックで同部の萌出を認めたが、今後は他歯の発育とともに対合関係の矯正治療を行う予定。